



弥生の出雲王に出会える

季刊

第50号

(2023年7月)



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★夏季企画展

「出雲平野の開発を始めた弥生人」

7月29日(土)～10月23日(月)

弥生時代は今に続く土地の開発が始まった時代です。誰も住んでいなかった未開の地にムラが次々と営まれて行きました。今回は、出雲平野を中心に縄文から弥生時代の遺跡の数や道具などに注目し、開発が始まった様子を紹介します。

出雲平野における最古の遺跡は、縄文時代草創期頃(約1万年前)の鬼ノ目谷遺跡(大社町)や川井戸遺跡(同)で、局部磨製石斧が発見されています。この頃から人間活動が始まったと推測できます。続く、縄文時代早期の山持遺跡(東林木町)や上長浜遺跡(西園町)で縄文土器が出土しています。現在、出雲平野では、縄文時代草創期から中期にかけて、約16の遺跡が確認されています。この頃の石斧は、木を伐採したり、土を掘ったりするのに使われました。縄文人はわずかな道具を使い日常生活を送っていたようです。

縄文時代後期～晩期になると、約20の遺跡が確認されています。この頃には、磨製と打製の石斧

(石鋏)があり、磨製(両刃)は木を切り、打製は土を掘る道具として使い分けられていました。

弥生時代前期には約33の遺跡が確認されています。磨製石斧には、両刃と片刃があり、両刃石斧は、木の伐採用、片刃石斧は木の表面を整える加工用として使われました。この片刃石斧は、「大陸系磨製石器」と呼ばれる新来の道具です。これらを使い、木製の鋏やスコップなどが新たに作られるようになりました。そして、縄文時代にはなかった水路が矢野遺跡や三田谷I遺跡などで造られます。出雲平野の弥生人は多くの種類の道具を使い、日々の暮らしを大きく変化させたことがわかります。続く弥生時代中期には、約66の遺跡が確認でき、遺跡数が倍増・



矢野遺跡の磨製石斧
(弥生時代前期～中期)

急増しています。その原因は、両刃石斧の重さの増加と鉄製の斧の使用により、生産力が向上したからと考えられます。つまり道具が進化したのです。出雲平野の弥生人はこれらの最先端の道具を使い、未開の地の開発をスピーディーに進めました。

開発が最も進んだ弥生時代中期には、優れた道具や技術によって出雲ならではの品が作られます。海上遺跡(塩冶町)の特殊な木製容器や、出雲平野を中心に分布する出雲型広口壺などです。荒神谷遺跡の青銅器群の埋納も中期末から後期にかけてです。このような特殊な資料は、「出雲ブランド」として、他地域の人たちにも知られていたことでしょう。

続く、弥生時代後期になると、遺跡数は約72となり、微増しています。この頃、四隅突出型墳丘墓で有名な西谷墳墓群が築かれました。弥生時代中期までに培われた開発の力を大形墳丘墓の築造に使ったのでしょうか。このようにみると、出雲平野の生活基盤は、約2千年前の弥生時代中期にできあがったと考えることができるので

(坂本豊治)

★ギャラリー展

「いつまでも戦後でありたい2022
旧大社基地に残る作業者の足あと」

7月5日(水)～10月30日(月)

アジア・太平洋戦争が終結してから今年で78回目の夏を迎えます。出雲市内にもこの大戦中に使用された施設跡などが、今でも数多く残っています。中でも斐川町にある旧海軍大社基地関連施設群は、島根県内でも屈指の規模の戦争関連施設跡です。

出雲市文化財課では、2021(令和3)年度から旧大社基地滑走路の調査を断続的に行っています。今回のギャラリー展はその速報展として、2022(令和4)年度の調査で見つかった滑走路建設作業者の「足あと」に焦点をあてて紹介します。

大社基地は旧日本海軍によって、終戦間際の1945(昭和20)年3月から6月にかけての3ヶ月余りで建設され、その作業には軍の関係者のほか、地元住民や学童(小学生)も動員されました。

2022(令和4)年に文化財課が滑走路表面のコンクリートを調査したところ、建設に従事した作業者のものと思われる「足あと」

が二十数か所で確認できました。これらは、地下足袋のものがほとんどですが、はだしのものも見つかっています。また、「足あと」のほかに、手のあとやタイヤ痕も確認されています。

今回のギャラリー展では、現地コンクリートごと切り取り持ち帰った「足あと」の実物をはじめ、調査時の写真などを展示し解説します。

78年の時を経て、コンクリートに残る「足あと」は私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。

今回の展示が、先人からのメッセージを受け止めて不戦の誓いをあらたにするきっかけになれば幸いです。
(三原一将)



滑走路のコンクリートに残る「足あと」

★速報展

「古志遺跡群発掘調査速報展
～中世古志郷の調査～」

開催中～9月25日(月)

古志遺跡群は出雲市古志町と古志町にまたがった、弥生時代から続く大規模な集落遺跡群です。今回の速報展では、古志遺跡群の中核となる古志本郷遺跡と下古志遺跡で実施した、最新の発掘調査成果をご紹介します。

2021(令和3)年に実施した古志本郷遺跡の調査では、中世の屋敷跡に伴うとみられる、1辺50mを超える規模の区画溝などを発見しました。区画溝の中からは輸入陶磁器や大型の鉄釘なども出土しています。2022(令和4)年に実施した下古志遺跡の調査でも、中世の溝や土器だまりなどを発見したほか、「和鏡」と呼ばれる和風の銅鏡も出土しました。どちらの調査地点でも、室町時代から安土桃山時代の遺構と遺物が中心でした。

古志遺跡群が所在する古志町と下古志町のあたりは、当時の出雲国神門郡古志郷に比定されます。神戸川を使った水運の拠点としても重要な立地にある郷でした。室

町時代を中心に、この古志郷を本拠として活躍した出雲の有力領主が「古志氏」です。

古志氏が治めた中世の古志郷、その痕跡を探る貴重な調査成果を、この機会にぜひ一度ご覧ください。
(須賀照隆)



中世屋敷跡の区画溝(古志本郷遺跡)



和鏡(下古志遺跡)

★よすみちゃん着ぐるみ

製作経過報告

当館のマスコットキャラクター「よすみちゃん」の着ぐるみを作りニューアルするため、2022(令和4)年11月3日から2023(令和5)年2月1日まで、クラウドファンディングを実施しました。

結果、目標額の150万円を上回る161万円の寄附が集まり、見事目標を達成することができました。多くの皆さまに様々な形でご支援いただきましたこと、心から感謝申し上げます。

現在、よすみちゃんのかわいらしいイメージを再現できるように、製作業者と相談しながら着ぐるみ製作に取り組んでいます。新たな着ぐるみは年内にお披露目できる予定です。

リフレッシュしたよすみちゃんは、弥生の出雲王と出雲市を全国に知っていただくため、力いっぱい活動します。

パワーアップしたよすみちゃんの登場をお楽しみに！

みんな待ってね!



★発掘たいけんコーナー復活!

新型コロナウイルス感染症防止のため、約3年間休止していた発掘たいけんコーナーが6月から復活しました。

このコーナーでは、実際に発掘する感覚を体験していただけます。また、砂に見立てたチップを使用しているため、服が汚れる心配もなく、楽しく遊べます。

ほかにも、感染症対策のため休止していた土器パズルなどの体験が復活しています。

夏休みにはぜひ当館へ遊びに来てください!

発掘してみてね!



発掘たいけんコーナー



★古文書の森をゆく⑬

「海外へ漂流した人々」

江戸時代の日本は鎖国をしていたので、庶民が海外に渡ることができませんでした。しかし船の遭難で海外へ渡り、日本に帰って来た人もいました。伊勢(三重県)の大黒屋光太夫や土佐(高知県)のジョン万次郎(中浜万次郎)が有名ですが、出雲にも海外へ漂流した後に帰国した人がいました。

それは河下村(出雲市河下町)の与茂吉という人物です。彼は若いころに村を飛び出して水主(船員)となり。文化7(1810)年11月、水主として歓喜丸という船に乗り、摂津(兵庫県)から江戸へ向かっていたところ暴風に遭い、漂流の末にロシアのカムチャッカ半島に漂着しました。

江戸幕府が編さんした外交史料集『通航一覧』には帰国した与茂吉の口述書が載っています。それによるとカムチャッカ漂着後、厳しい寒さと飢えで乗組員16名の内9名が死亡し、その後ロシア人に保護されました。与茂吉らは、江戸幕府に捕まっていたロシア人艦長・ゴローニンとの交換交渉のためカムチャッカからオホーツク

へ、さらに国後島へ移送され、日本に帰国します。漂流してから約2年、文化9(1812)年のことでした。大黒屋光太夫やジョン万次郎は帰国するまでに約10年かかっているのですが、2年で帰国できた与茂吉たちは運が良かったのかもしれません。

帰国した与茂吉らは幕府の役人から取り調べを受け、ロシアでの様子、移送で乗ったロシア船のことなどを語っています。取り調べと同時に与茂吉の出身地・河下村へも身元照会が行われており、その返答の古文書が残っています。

河下村に帰った与茂吉のその後の様子は、残念ながら記録に残っていません。しかし、漂流という過酷な経験をした与茂吉の余生が穏やかなものであったことを願うばかりです。

(赤木 薫)



洋装の大黒屋幸(光)太夫

(国立国会図書館デジタルコレクション
『漂流御覽之記』より)

★展示のご案内

▼夏季企画展

7月29日(土)～10月23日(月)

「出雲平野の開発を始めた弥生人」

●ギャラリートーク

8月6日(日)・9月17日(日)

10月14日(土)

※いずれも10時から



弥生時代の大きな水路
(古志本郷遺跡)

▼ギャラリートーク

7月5日(水)～10月30日(月)

「いつまでも戦後でありたい」

2023 旧大社基地滑走路に

残る作業者の足あと」

●ギャラリートーク

7月29日(土)・8月26日(土)

9月30日(土)・10月28日(土)

※いずれも10時から

▼速報展

開催中～9月25日(月)

「古志遺跡群発掘調査速報展

～中世古志郷の調査～」

★講座・講演会のご案内

▼夏季企画展関連講演会

① 9月9日(土) 14時～16時

「開発と道具～石から鉄へ～」

●講師 下條 信行 氏

(愛媛大学名誉教授)

●受講料 無料

② 9月24日(日) 14時～16時

「弥生時代における道具の進化」

●講師 河合 章行 氏

(鳥取県立むきばんだ史跡公園)

●受講料 無料

※最新情報は博物館

ホームページを

ご確認ください。



▲ホームページ QRコード

講座・講演会の申込について

定員各80名 当日受付なし

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●申込受付時間 9～17時

●必要事項 氏名・電話番号・住所

Instagramで
情報発信中☆
ぜひチェック
してね!



YAYOI.HAKUBUTUKAN

▲Instagram QRコード

★館長古来夢

5月16日の京都、4年ぶりに葵祭の王朝行列「路頭の儀」が開催された。雨で1日延期された行列だったが、京都御所の出発地点では上皇ご夫妻が観覧された。ニュース映像には、テントにお座りのお二人に対し、後ろから何やら熱心に話しかける人物が。見覚えのある顔だと思ったら猪熊兼勝さん。奈良での勤務先の元上司。このたより第32号で書いた、南米チリのイースター島調査(93年)では、猪熊さんが総括担当だった。私はチリの首都サンティアゴから島に渡ったのだが、フロリダから到着した便を現地の旅行会社の人が迎えてくれた。空港からホテルに向かう間あれこれ雑談をしていると、彼が「お前は英語が多少話せるから助かる。イノクマは日本語しか話せないのに、あちこちの観光地へ案内させられて閉口したよ」とこぼしていた。

一泊し、夕方に空港まで送り届けてもらっていいよ島へ。ところが定刻になってもゲートが開かない。列に並んでいたダンサーの娘さんと話をすると、なんでも大統領の海外出張にチリ航空の機体

を使ったためやり繰りに支障がでたらしい。結局、離陸したのは翌日午前1時。明け方に島へと降り立って、「こいつは俺の友人だ」と強引に手荷物検査を省略させたのには、びっくり。

猪熊さんが葵祭に関わり、また時に「我が儘」なのは、猪熊家が有職故実を生業とした公家だから。磯田道史『日本史を暴く』を読んでいたら、幕末の孝明天皇の便器の構造を兼勝さんの父兼繁さんに取材したのが映画監督・俳優の伊丹十三だったとの話がのっていた。さて、島に着いた私は一睡もすることなく炎天下の現場に連れ出された。勘弁してよ猪熊さん。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2023年7月

〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

(TEL) 0853-25-1841

(FAX) 0853-21-6617

(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp

https://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料 / 無料

●開館時間 / 9:00～17:00

(入館は16:30まで)

●休館日 / 火曜日

(祝日の場合は翌平日)

年末年始

